

琉球病院 Monthly



独立行政法人
国立病院機構 琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.40
2016. April

発行者 琉球病院事務部長
有岡 雅之

基本理念

この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

<外来診療棟等改修整備工事が完成しました>

企画課長 金子 龍也

平成27年7月の東病棟新築完成につづき、平成28年3月に外来診療棟等改修整備工事が完成しました。今回の工事はこども外来を含む外来診療機能の拡充を中心に行ってまいりました。診療を行いながらの工事ということで患者様並びに関係者の方々にご不便をおかけいたしましたことを紙面をお借りしてお詫び申し上げます。本工事の経緯を説明いたしますと前述の外来診療機能の向上を目的に平成25年度に工事の計画がなされ、沖縄県の地域医療再生基金の補助承認をいただき平成27年9月に着工いたしました。



まずは外来棟拡充のために外来棟にあった薬剤科を旧北Ⅱ病棟へ移動しました。同時に男女更衣棟も移動、続いて物品庫・書庫、休憩室等を移動し外来拡充スペースを確保、この間に旧薬剤科を外来診察室、処置室、スタッフステーションに改修し平成27年12月に新外来をオープンしました。続けてこども外来の診察室を増設し平成28年2月にオープン、地域医療連携室、医室室を移動した後、外来診察室を増設、平成28年3月外来診療棟フルオープン運びとなりました。このようにローテーション移動を繰り返しながらの工事であり、工事時間も限られており施工業者の方々も大変苦労されたと思います。あらためて感謝いたします。今回の工事で外来診療棟は見違えるほどきれいになりました。また診察室数も倍増し、処置室、面談室、プレイルーム等も増設され機能性も向上したものと考えます。受診される患者様にとりまして、一般外来とこども外来が分離されたことにより、より受診しやすい環境となりました。当院の基本理念にあります「この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である」にまた一歩近づいたものと自負しております。新しい外来診療棟がオープンしました。今後とも患者様、地域の皆様に貢献できる病院を目指してまいります。皆様のご指導、ご支援をいただけますようお願いいたします。

院長

福治康秀(ふくじ やすひで)
1964年生まれ、那覇市出身、
首里高校卒。

1993年琉球大学医学部卒、
琉球大学医学部精神神経科入局。
95年那覇市立病院精神科、96年
琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、
2010年副院長を経て2014年琉球病院院長に就任。
日本病院・地域精神医学会理事。



診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・物忘れ外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数

406床

- ・精神科病棟 181床
- ・認知症 50床
- ・アルコール 54床
- ・児童思春期
ユニット 4床
- ・重症心身
障がい 80床
- ・医療観察法 37床



●アクセス
路線バス/那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス
[77番名護東線 1浜田]バス停下車徒歩3分
自動車/那覇市から40分
沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

トピックス

行事・出来ごと

- 病棟等建替整備の動き
 - 進捗状況 本体工事：請負業者 電気設備 (株)九電工
 - 機械設備 (株)三建設備工業
 - 建築(第2期)工事 (株)浅沼組
 - 新病棟(第1期工事)完成 平成27年7月
 - 外来診療棟改修工事完成 平成28年3月

教育・研修

- 平成28年度新規採用職員等研修会
 - 日時：平成28年4月4日(月)～4月6日(水) 3日間
 - 場所：研修棟3F研修室 【院内対象】

● 地域医療連携室だより

当院では一般精神科のほか、アルコール等の依存症治療全般、児童思春期、認知症などの専門治療を行っています。また、長期入院の患者様の退院促進にも取り組んでいます。多職種チームでの治療的介入と、地域の支援者、ご家族と日々連携しながら、本人が安心して地域生活ができるよう支援を行っています。

なお、外来診療については予約制になっております。予約相談以外にも、お困りの事などございましたらお気軽に地域医療連携室へご相談ください。

お問い合わせ時間

8:30～17:15 (土・日・祝日以外)
TEL: 098-968-2133 (代)
内線: 231・234

地域医療連携室(直通)
TEL: 098-968-3550
FAX: 098-968-7370



空床状況
3月29日現在

精神科病棟
10床

認知症
3床

アルコール
8床

児童思春期ユニット
2床

※ 入院予約に関するお問い合わせは地域医療連携室へご相談下さい。

治療抵抗性精神疾患への医療



クロザピンの治療状況

平成22年に1例目のクロザピン（CLZ）治療を開始し、全症例は164例になりました。平成28年2月のCLZ導入は3例でした。うち2例は他の病院からのご紹介例で入院中の患者様でした。CLZ治療前に暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離が必要な患者様も多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動もなくなり、隔離は全て解除できています。週に3回の専門外来も行っていきますので、治療抵抗性統合失調症の患者様のご紹介をお願いいたします。

m-ECT（修正型電気けいれん療法）の治療状況

当院では、m-ECT（修正型電気けいれん療法）による治療を行っております。平成28年2月の治療実績は2例であり、各症例とも改善傾向が認められております。

こども心療科

以前もご紹介しましたが、こども心療科では今年度、年齢や発達課題に応じた複数の集団グループを実施しました。そのうち5歳児就学前グループについてご紹介致します。1年間、月に1回のグループで書く練習、発表の練習、順番を待つ練習、集団ゲームに取り組みました。緊張しながらも自分の気持ちを表現したり、負けを受け入れられない気持ちに折り合いをつける練習をしたり、子ども達それぞれの課題に向き合ってくれました。見守る保護者やスタッフはハラハラでしたが、就学を前にたくましく成長する姿に大人もたくさんのお話を聞いて貰った気がします。4月以降のグループについては現在検討中です。保護者勉強会も計画しております。関心を持たれた方は子ども心療科にお問い合わせください。

認知症医療

認知症予防の取り組みとして、4月から毎週木曜日に「もの忘れ予防教室」（認知リハビリテーション）が始まります。定員15名、3ヶ月を1クールとして認知症にならないためのリハビリテーションを行います。

認知症は、まだ治療法が見つからない病気なので、予防が大切です。また、軽い認知症になり始めても脳を刺激したり生活習慣を整えることで、認知症の進行を止めたり、遅らせたりすることはできます。筑波大学付属病院のデータでは、リハビリを受けていない人が、1年後に認知機能が下がっていたのに対し、リハビリを受けた人は認知機能がアップしていました。認知症予防のために認知リハビリテーションが効果があることが分かっていることは、全国各地で公民館の健康教室や施設でのレクリエーションなどに取り入れられています。しかし、病院で予防に取り組んでいるところは多くはありません。

琉球病院で行う「もの忘れ予防教室」は、3ヶ月（1クール）の初めと終わりに検査を行い、認知機能がどのように変化したかを参加者のお1人おひとりにお示しします。認知症ではないが前認知症の段階にある方には、脳に刺激を与えるリハビリだけでなく、認知症を予防するために、進行を遅らせる薬を処方することもできます。リハビリの内容も、その人の症状に応じたものを実施します。認知症が否かの診断、個人に応じた予防のための治療、時間とともに変化していく症状の評価が出来るのが、公民館や施設での取り組みと違う所です。全国でも病院で認知症予防に取り組んでいるところは、多くはありません。

琉球病院では認知症予防の取り組みとともに、認知症という病気について啓発活動も行っています。月に1回、第4木曜日に「認知症家族教室」を行っています。医師や看護師、心理士、作業療法士、栄養士、精神保健福祉士が認知症について専門的な講義を行い、参加者の質問に答えます。参加は自由で予約もありません。家族教室に参加される方は、認知症患者のご家族や施設職員など認知症に興味がある方や困りごとを抱えている方が来られます。質問も一般的なケアの仕方から、認知症の症状を呈している人をどうしたら病院へ連れて行けるかという切迫したことまで様々です。

認知症について知りたい方、予防に興味がある方、ケアや治療に困っている方は地域医療連携室へご連絡下さい。

重症心身障がい医療

今回は、自閉症スペクトラム障害について。以前にも書いたことがありますが、3月から4月にかけては変化の大きい季節です。

気候も暖かくなり、長袖要らずな季節に入っていきます。また周囲で、関係性の強い人の顔ぶれが変わることも有るかもしれません。このような「変化」は、当病棟の利用者の方々の中でも、自閉症スペクトラム障害の特性を持つ方へ大きな影響を与えます。職員の病棟間異動・病院間異動・退職など、仕方がない出来事ではあるものの、避けることが出来ません。こういった変化により日常生活にも微妙な変化が生じるのでしょうか、5月に入ってくると精神状態に乱れが出てくるケースをよく体験します。病棟に残った職員が丁寧に対応し続けつつ毎日を消化していくのですが、利用者の方々「慣れ」に繋がっていくのですが、今年はどうなるのでしょうか。これから踏ん張り時です。

アルコール・薬物依存医療

平成25年5月27日、アルコール依存症の新しい治療薬「レグテクト」が発売となりました。レグテクトは、アルコール依存症の方の強い『飲酒欲求』を直接和らげてくれる作用があります。当院では2月現在、外来通院の患者様57名、入院中の患者様21名の方が服用されています。内服している方は「飲酒欲求が軽減した」と話され、再飲酒の抑制につながっています。当院での実際の効果を判定するための調査を行う予定です。患者様へは、適宜導入を勧めています。断酒が困難な方は、ぜひ外来を受診し相談して下さい。

平成28年2月19日（金）に、肥前精神医療センターの武藤岳夫医師を講師にお招きして、平成28年度第6回HAPPYプログラム研修会を開催致しました。HAPPYプログラムとは、依存症治療拠点病院である肥前精神医療センターの開発した減酒支援のための包括的プログラムです。アルコール健康障害対策基本法が制定され、今後、各都道府県においても、アルコール健康障害対策推進計画が策定される予定です。法の中では、アルコール依存症対策に加えて、多量飲酒者や生活習慣病のリスクの高まる飲酒者に対する減酒の必要性や、減酒指導のできる人材育成を強調しています。まさに、減酒支援は今必要とされるスキルです。県内各地から保健所や行政の健康保健に関わる保健師を中心に19名の参加がありました。栄養士、心理士という多職種の参加もあり、大いに盛り上がりました。

包括的地域精神医療（ACT）

新年度を向かえ、訪問看護の利用者様も新たな活動が始まる方、現状維持ではあるが、少しずつのステップアップを目指すことを考えている方等様々です。訪問看護スタッフは、配置換えはなく、これまでのスタッフで頑張ります。利用者様の夢や希望、やりたいことを一緒に考え、悩みながら共にゆくりと歩んでいきたいと思っております。

今後ともよろしく申し上げます。

臨床研究部活動状況

『がんを併発した統合失調症の終末期患者を看護する精神科看護師の体験プロセスに関する研究』 看護師長 吉岡美智子

精神科病棟においてがんを併発した統合失調症の終末期患者に対する看護師の体験プロセスを明らかにし、看護への示唆を得ることを目的とした研究を行いました。対象者は、精神科病棟に入院中のがんを併発した統合失調症の終末期患者に対する看護に携わった精神科経験5年以上の看護師8名とし、半構造化インタビューでデータを収集し、分析を行いました。その結果、29概念、8カテゴリが得られました。看護師はがんを併発した統合失調症の終末期患者に遭遇すると「がん看護経験不足による不安」と「患者に「何かしてあげたい」思い」を同時に抱きながら「患者と向き合いたいのに向き合えない中で看護の模索」をしておりました。その中で「自分のすべきことに気づかされる」という体験によって行うべきケアが明確になり、「患者や家族の要望に沿った看護の実践」をすることで「穏やかに死を迎える患者への満足」を抱いていた一方、「がん看護不足経験による不安」が募ると「精神科病院で看ることへの葛藤と苛立ち」を抱きながら看護を継続することとなり、患者との死別によって看護師は「納得のいかない看護への後悔」をしていました。本研究では、精神科病院においてがんを併発した統合失調症の終末期患者を看護する看護師の思いとケアが相互に影響しながら変化するダイナミックな体験プロセスを明らかにすることができました。